

1. 総説

1. 本県管轄の沿革

原始 我が千葉県には、成田市や佐倉市のローム層中から発見された石器によって今から約3万年前に人類の住んでいたことが明らかとなった。氷河時代の終末期にあたり、巨大獣を捕獲して食料とし、生活していた。1万年ぐらい前になると、氷河もとけて気候も温暖となり、生活様式も変わってきた。すなわち、従来の狩猟に加えて漁撈や植物採集を行うようになり、土器が用いられ、いわゆる縄文時代の幕あけを迎えたのである。東京湾や現利根川流域には巨大な貝塚がのこされ、貝塚文化を形成した。縄文時代の晩期も終わりに近づくと、西日本には、大陸文化の影響を受けた弥生文化が誕生した。金属器や稲作・機械技術を伴う高度な文化であった。千葉県には、弥生中期、紀元前1世紀ころに伝えられ、農耕集落が営まれたようである。

古代 5世紀のころ、大和朝廷の東方への勢力伸長により房総の諸豪族もこれに服従し、大和朝廷の北方長官に任命された。これが国造であり、房総には、11の国造が置かれた。この国造の統治時代を前後して高塚式古墳が営まれ、古墳時代の名称で親しまれている。特に、富津・木更津・市原市内の海岸平野や台地上に優れた古墳がのこされている。

大化改新により、はじめは上総・下総の両国となり、奈良時代に上総国の郡を割いて安房国が独立した。中央から国司が派遣され、国衙において政務を担当した。付近には、国分寺が建てられ、地方文化の中心となった。

特に、産物では、良質の麻を産出し、望陀地方で作られた布は、中央貴族に珍重された。

平安時代に入ると、地方政治が乱れ、平将門の乱や平忠常の乱が起り、房総の地は疲弊した。のち、忠常の子孫から千葉氏や上総氏が台頭し、活躍した。

中世 源頼朝が鎌倉に幕府を開くに際しては、千葉常胤、上総広常の功が大きく、安房の安西、丸、神余、東条の諸氏も頼朝に協力し、安堵の状を得てそれぞれ房総の所領を治めた。室町戦国時代には、安房の里見をはじめ、千葉、土岐、武田等の諸氏及び、相模の北条氏が中央政権の争奪戦や、関東管領の対立抗争の渦中に巻き込まれて戦乱を事としたので、房総の地は四分五裂して、人民は大いに苦しんだ。この間郷土の傑僧日蓮の唱えた法華宗が広く信仰された。

近世 秀吉が北条氏を征して関東の地を家康に与え、次いで家康が江戸に幕府を開くや、房総の地は膝下として重要であるため、幕府は、天領、旗本領や佐倉藩をはじめ譜代の小藩を配置した。初期には9藩、幕末には16藩、明治初年には23藩であった。この間房総の開墾事業は進み、十六島の開拓、樺海干拓約2,800町歩、手賀沼疎水の開通、印旛沼の干拓計画などあって耕地が大いに拡張され、享保年間には青木昆陽によって甘藷が栽培され、生産はしだいに増加した。又行徳を主として各地に塩田が開発された。一方では、野田、銚子の醤油醸造業もしだいに発達し、江戸はもとより全国に名声をうたわれるに至った。

近代 慶応4年、新政府は府・藩・県の三治の制を定めた。大名領以外の地に、安房上総知県事と下総知県事を置いた。明治2年に管割地が宮谷県と葛飾県となり、4年7月、廃藩置県によって24の藩は県となり、計26県を数えた。同年11月、安房上総が木更津県に、下総の大部分が印旛県に、下総東部の香取・海上・匝差の3郡が新治県に所属した。6年6月に木更津・印旛の両県を合併し、県庁を千葉町に置き、千葉県が藩生した。のち同8年5月に新治県が廃止となり、下総東部の3郡が千葉県に編入され、下総の利根川以北の地が茨城県に管轄替えとなって、ほぼ今日の如き千葉県の行政区が確定した。

初代県令は、「県治方向」を著して県政の基本方針を示された。漁業と製茶業を奨励し、2代県令は養蚕業の発展に努めた。明治32年に水産試験場を、42年に農事試験場を、44年には各郡に稲の原種試験場が設置され、松戸町に県立園芸専門学校を開校した。

現代 戦後、昭和25年ごろ、将来を指向した県政の基本目標が検討された。27年3月、「産業経済振興計画」が立案され、農林水産業を産業構造の根幹としていた本県にも、工業の導入という極めて漸新的な事業が実施に移され、京葉工業地帯の造成が急ピッチで進められた。内陸工業の導入、ニュータウンの造成、新東京国際空港の開港、道路網の整備と県内は大きく変わりつつある。公害を防止し、本県がもつ豊かな自然と調和のとれた発展を図るべく努力が傾けられている。